



### 第三章. 南大阪の万葉を歩く

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 右富実 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/10397">http://hdl.handle.net/10466/10397</a>

## 第三章 南大阪の万葉を歩く

### (一) はじめに

現在の南大阪沿岸の地形と万葉時代の地形には大きな違いがある。それでもなお、西に広がる海と、常世国のように浮かぶ淡路島は一三〇〇年の時差を感じさせない。この章では、万葉歌碑を道標に南大阪の万葉故地を歩くことにする。

### (二) 岸和田と高石

南大阪沿岸の万葉故地をめぐるには南海本線とJR阪和線が適している。今回は、南海難波から出発することにしよう。難波から急行に乗れば、三十分もしないうちに岸和田に到着する。当時このあたりの海は「茅渟の海」と呼ばれていた。岸和田駅から海に向かって歩くこと約十五分、古城川緑道の中にある欄干橋のすぐそばに、

珍海 濱邊小松 根深 吾度戀 人子妬

茅渟の海の 浜辺の小松 根深めて 我恋ひ渡る 人の見故に (11・二四八六「人麻呂歌集」)

の歌碑がある。歌は、茅渟の海の浜辺の小松の根が深いことから自分の恋の深さを歌ったもの。結句「人の見故に」(「他人の恋人なのに」の意)から、思う相手にはすでに恋人がいることがわかる。また、当該歌の原文を見ると、



二四八六番歌の歌碑

助詞や助動詞に当たる表記がなされていないことに気づく。こうした書式は、人麻呂歌集所出の万葉歌に特徴的であり（人麻呂歌集所出歌のすべてがそうだというのではない）、「人麻呂歌集略体歌」と呼ばれる。

また、当該歌には本文に続いて異伝が記される。

或本歌曰 血沼之海之 塩干能小松 根母己呂尔 戀屋度 人兒故尔

或本の歌に曰く、茅渟の海の 潮干の小松 ねもころに 恋ひや渡らむ 人の見故に（11・二四八六「人麻呂

歌集」異伝歌）

こちらは、助詞や助動詞が表記され、さらに二～四句に小異がある。本文歌は「浜辺の小松」という一般的な景と、「根深めて」というこれもまた一般的な表現を経て、「深めて我恋ひ渡る」の本旨の部分が導かれる序歌となっているが、これに対して、異伝歌では、「潮干の小松」と潮に根が洗われる干潮の松が描かれ、「ねもころに」が導かれる。「ねもころに」は「心を込めて」というほどの意味。続く「恋ひや渡らむ」は疑問の「や」を含むことからわかるように、自己の感情に対する疑念を見て取ることができる。自省的な方向に傾くのが異伝歌といってよからう。しかも、序詞で表現されるのは「根」が潮に洗われるように外から見えている状態——外から見えてしまっている状態——であり、恋心が世間に知られてしまっている様子さえうかがえる。つまり、類歌関係にある二首ではあるが、より一般的な本文歌に対して、個性的性格の強い自省的な異伝歌があるといつてよい。あるいは人麻呂歌集略体歌の本文歌を、一回的な恋愛歌に換骨奪胎したものが異伝歌なのであろうか。実際に本文歌異伝歌の両歌がいかなる際に歌われたかは知るよしもないが、茅渟の海の景が上手に序詞に組み込まれた歌といつてよい。

ただ、残念ながら現在の歌碑の場所から海を見ることはできない。「茅渟の海」を見るためには、この歌碑からさらに十数分海に向かって歩かなければならない。天気によれば六甲の山並が見えるだろう。「茅渟の海」は高石・忠岡・泉大津・岸和田の海のことであり、六甲の山並は摂津菟原うまひの地である。ここは、茅渟の男が海を渡って、菟原娘子を「妻問ひ」した伝説を持つ。この伝説は、「見菟原處女墓歌一首」（9・一八〇九～一八一）、「追同處女

墓歌一首」(19・四二二～四二二二)に詠まれている。一度目を通してもらいたい。

さて、岸和田駅にとつて返し、南海本線の高石まで各駅停車で二十分弱。高石は「高師の浜」として知られていた。

大伴乃 高師能濱乃 松之根乎 枕宿杼 家之所偲由

大伴の 高師の浜の 松が根を 枕き寝れど 家し偲はゆ (1・六六 置始東人)

文武三年(六九九)一月二十七日～二月二十二日、文武天皇は難波に行幸する。この歌はその時のものと思われる。作者である置始東人は万葉集にしかその名を残さないが、弓削皇子挽歌(2・二〇四～二〇六)の作者でもあり、当時の宮廷歌人らしい。難波宮は現在の大阪城の南側に位置していたから、高石まではかなりの距離がある。一ヶ月近い行幸故、その途中に「高師の浜」にまで足をのばしたものののだろうか。歌は高師浜の松ヶ根を枕に寝るけれども、家のこと、大和のこと、妻のことが思われてならない、という典型的な旅の歌である。

高石駅から歩くこと約二十分。加茂小学校の北側の道路を挟んだ植え込みに、

妹手呼 取石池之 浪間徒 鳥音異鳴 秋過良之

妹が手を 取石の池の 波の間ゆ 鳥が音異に鳴く

秋過ぎぬらし(10・二一六六)

の歌碑がある。「取石」は、現在でも「取石」としてその地名が残っている。「妹が手を」は、「取石」の「とろ」に掛かる枕詞。その「取石」の池の波の間から、鳥の声



二一六六番歌の歌碑

が普段とは異なつて聞こえてくる。その声に秋の終わりと冬を見出す歌である。

この歌碑は、写真を見れば一目瞭然（六十五、六十七頁の写真参照）、岸和田の歌碑と全く同じタイプである。これは歴史街道プロジェクトの成果。ただし、基本的に万葉歌は添え物の感が強い二基であった。

この二基の歌碑を見るだけで優に午前中一杯はかかるつもりでいたほうがよい。この歌碑からの最寄り駅はJR富木駅だが、二十分以上歩くことになる。

### (三) 塚

JR富木駅から北に向かう。富木から百舌鳥までは各駅停車で九分。百舌鳥駅付近で昼食となる。駅近辺には、食事のできるところが多いので、お弁当を用意して大仙公園で食べるのもよいかもしいない。

その大仙公園の目玉は大仙古墳（伝仁徳陵）である。堺には大仙古墳をはじめ、田出井山古墳（伝反正陵）、石津ヶ丘古墳（伝履中陵）などを中心に、いわゆる百舌鳥古墳群が広がる。それぞれの古墳を見るのも悪くない。

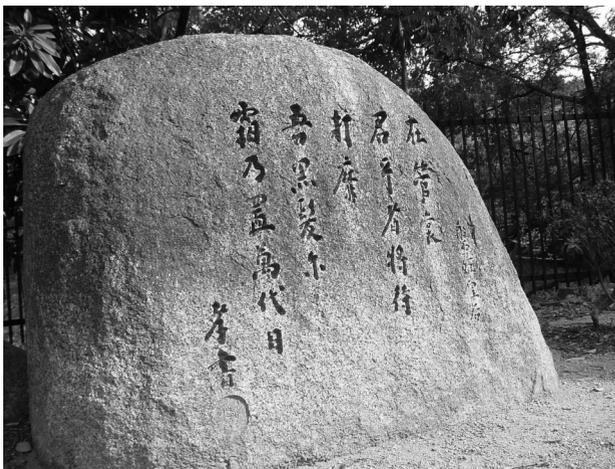
百舌鳥駅から徒歩約十五分、大仙古墳（伝仁徳陵）のお堀沿いには、

在管裳 君乎者将待 打靡 吾黒髪尔 霜乃置萬代日

ありつつも 君をば待たむ うちなびく 我が黒髪に 霜の置く

までに（2・八七）

の歌碑が建つ。黒髪に霜の置くまで君の訪れを待つと歌うこの歌は、



八七番歌の歌碑

仁徳天皇の皇后である磐姫の作と万葉集には伝える。勿論、磐姫の実作ではなく後の仮託の作である。また、大仙古墳が実際には仁徳天皇を葬ったものでないことは既に判明している。こうした現代の研究水準を当てはめてしまふと、いささか滑稽なことになってしまふが、実際に木漏れ日を浴びる歌碑を前にすると、磐姫がこの歌を詠つても構わない気持ちになつてしまふ(一)。

なお、記紀に伝わる磐姫像と万葉に伝わるそれとは大きく食い違いを見せる。一度読み比べてみてはどうだろうか。

この歌碑から徒歩約二十分。方違神社に到る。方違神社は、摂津、河内、和泉、三国の境まがひに位置する。堺市、三国ヶ丘という地名はこれに由来するといわれている。この方違神社の入り口左の標柱には、

三国山 木末尔住歴 武佐左妣乃 此待鳥如 吾俟  
将瘦

三国山 木末に住まふ むささびの 鳥待つごとく  
我待ち瘦せむ(7・一三六七)

の歌が刻まれる。しかし、この「三国山」は堺市の三国ヶ丘とは無関係の可能性が高い。たとえば、渡瀬昌忠氏『万葉集全注』は、

所在未詳。福井県坂井郡三国町の山も「有力な候補地」(注釈)とされるが、三つの国の国境がそこに集中している山の名で、各地にある。

と、述べる。実際、三国ヶ丘には山らしい山はなく、残念ながら三国ヶ丘を歌つたものではないだろう。



一三六七番歌の歌碑

また、写真撮影に行ったのは十一月。七五三の看板がこの標柱に立てかけられ、紐で結わえられていた（前頁写真参照）。この歌碑は、天明三年（一七八三）に建立されたもので、万葉歌碑のなかでも極めて古い部類にはいり、貴重なものであるが、七五三の敵ではなかった。

さて、先を急ごう。住吉方面へと向かう。方違神社から堺東までは徒歩で五分ほど。堺東からは南海高野線に乗り、天下茶屋で乗り換え粉浜まで行く。この間約十分。

粉浜の駅を出るとすぐに歌碑は見つかる。

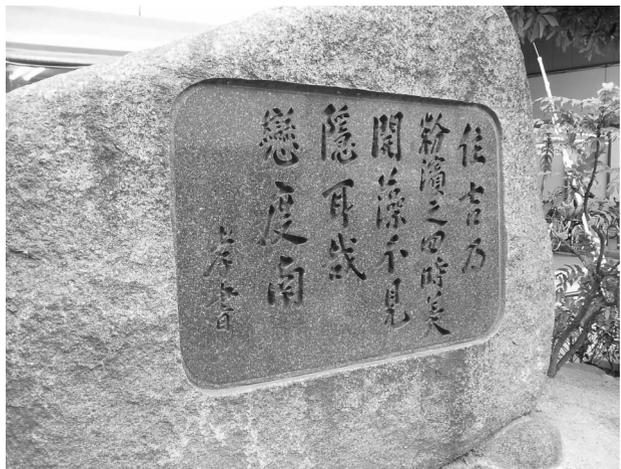
住吉乃 粉濱之四時美 開藻不見 隠耳哉 戀度南

住吉の 粉浜のしじみ 開けも見ず 隠りてのみや 恋渡りなむ  
(6・九九七)

天平六年（七三四）三月の難波行幸に際しての作者未詳歌である。

「しじみ」は現在のしじみと同じ。初～三句が「開く」を起こす序詞になっている。恋する相手に打ち明けることもせず、心の内で恋うていることを歌っている。もともと、現在の粉浜付近は当時海中だったと思われる、実際にはもう少し内陸部が海岸線を形成していたと思われる。そして、その海岸線は決してなだらかなものではなかったようである（吉井巖氏『万葉集全注 卷六』他）。南北に連なる段丘の下に幅の狭い砂州が続いていたと考えられる。千三百年の地形変化を念頭に置いてあらためて歌を読んでみて欲しい。

ところで、この犬養孝氏の書になるこの歌碑は、極めて堂々としつらえられている。歌碑を探し歩いていると、すでに移転されていたり、所在不明になっているものに出くわすこともある。うらさびたところに、誰にもかえり



九九七番歌の歌碑



今はこの説によっておくこととする。なお、歌碑にも見えるように、「住吉」は「すみのえ」と訓む。この歌に限らず、奈良時代までは「すみよし」という地名はなく、すべて「すみのえ」だったと思われる。

#### (四) むすび

この後、徒歩で住吉大社まで十分ほど。万葉の時代に現在の社があったとは思えないが、反橋（太鼓橋）を渡り、国宝の社殿見学は外せまい。暮れなずむ境内を一周し、六百基にも及ぶ石灯籠を眺めて一日の行程を終えることにしよう。

注

(1) 二〇〇七年には、この歌碑のすぐ近くに、磐姫の歌碑が四基設置される。